



Japan Association for Refugees

# for Refugees

難民支援協会 (JAR) ニュースレター Vol. 25 Sep. 2022

## Contents

- 難民認定を受けた方のインタビュー
- この夏の支援
- JARインタビュー vol.2【渉外チーム：赤阪むつみ】
- ウクライナ難民の受け入れが進む中、包括的で公平な難民保護を求め発信を続けています ..ほか



### — 難民認定を受けた方のインタビュー —

生きのびるためではなく、自分の人生を生きるために

イスラム主義勢力・タリバンが復権し、深刻な迫害が続くアフガニスタン。2021年には約270万人が難民となっています。かつてアフガニスタンから日本に逃れ、その後難民認定を受けて日本で暮らす方に、国を離れた背景や今の思いをうかがいました。

#### — アフガニスタンは日本とどのように違いますか？

アフガニスタンにも様々な人がいて、色々な生活文化があり、皆が違う見方を持っています。皆が皆タリバンのようなわけではありません。しかし、アフガニスタン人の99%はイスラム教徒で、その多くが強い宗教観を持っています。アフガニスタンでは十分な教育が提供されておらず、女の子や女性は特に、特定の法に従わなければなりません。男性も多くの法に従わなければならず、タリバンが来てからの生活は非常に苦しいです。

日本ではどの宗教を信じるか、あるいは信じないかを自由に選ぶことができますが、アフガニスタンで生まれたらイスラム教徒になるしかなく、それ以外の選択肢はありません。他の宗教について調べることも禁止されています。

#### — 国を離れようと思ったのはなぜですか？

第一の理由は、安全でないからです。アフガニスタンを含む多くの場所では、そもそも安全がどのようなものなのかすら、多くの人たちが知りません。タリバンの考えを受け入れず、その結果殺されることもあります。

第二の理由は、私の生き方、生活様式や夢など、すべて

のことにおいて、社会や他の人と考え方が違っていただけからです。私は子どもの頃に生き方を変えました。その考え方や生き方を続けていたら、いつか殺されるかもしれません。

#### — いつ頃、母国を去ろうと決めましたか？

子どもの頃から、ずっと外へ出る方法を探し続けていました。孤独でした。誰も信用できないし、外へ逃げる方法を毎日一人で探し続けました。

タリバンが政権を掌握する以前から、アフガニスタンのパスポートは世界で最も弱いパスポートで、どこにも行けない、ただの紙切れと同じだったので、外国へ行って助けを求めるのはとても難しいことでした。私は不法入国ではなくビザを持って入国しましたが、日本に来るのは本当に本当に大変でした。実際に逃げる先を探し始めてから今にいたるまで、10年くらいかかりました。

#### — 日本に来てみてどうでしたか？

(来日前に) 日本のことや日本の文化について読んだり見たりしていた時は、日本はいいところで、いい人もたくさんいるんだろうな、くらいにしか考えていなかったのですが、実際に来日してみると、その想像を超えてい

ました。もし天国が存在するなら、日本は天国のようなところだと思いました。難民申請をするのはとても時間がかかりましたが、その間多くの方が自分を支えてくれ、そのおかげで難民認定を受けることができました。

#### —難民認定を受けた時は、どう感じましたか？

マンガでは、別世界に行く話がよく出てきます。たとえば、目が覚めたらまったく違う世界にいる、というような。私にとってはそのような感覚でした。難民認定されたら入管の職員から聞いた時、新しく生まれ変わり、新しい生活・新しい機会が与えられたと感じました。

生きのびる (survive) ためではなく、自分の人生を生きる (live) ために生きることができる、新しい人生。それまでは毎日、毎秒、生きのびることに必死でした。難民の多くが抱える、寝る場所がない、食べるものがない、入管からの結果を待たなければならないといった問題も、行きたいと願っていたところに来ることができたと思えば、私にとってそこまで苦痛ではありませんでした。でも、難民申請中はここにいられる保証はありません。

日本人たちには、まずは心の底から感謝したいです。どううまく言葉にすれば良いかわからないですが、とに

かくありがとうと言いたいです。

難民支援協会や政府を通じて多くの組織が難民を助けていますが、それは多くの日本人たちが彼らを支えているからです。日本の皆さん一人ひとりのおかげで、良い社会ができています。難民を支援していることは、人の命を救っているということです。とにかく、私の命を救ってくれたことに感謝しています。

日本で (人生を全うして) 死ぬまでの間、日本のために何か良いことをしたい、これが私の目標です。私が亡くなった時、日本が救った1人の人が日本に良い影響を与えてくれたと、ほんの小さなことでも思ってもらえるようにしたい。

今の夢は、アニメを作り、自分のこの長い旅の中で見てきた人々のことを伝えることです。伝えることで、誰かの考えを変えることができるかもしれないから。新しく想像することができるし、新しい人生を歩むこともできるし、もっといい世界を作ることもできる。道のりは長いと思いますが、いつか必ず実現させたいです。

※このインタビューは、2022年6月に行われた「世界難民の日 2022：難民に心を寄せて—Refugees and “We” Talk」の動画をもとに、再構成したものです。個人の保護のため、記載に配慮しています。

## この夏の支援（期間：2022年7月1日～8月31日）

新型コロナの再拡大や記録的な猛暑の中、もともと脆弱な立場に置かれている難民の方々の困窮が一層深まったことを実感する期間となりました。

難民の方で本人の来日期間の長期化や、コロナ禍でこれまで頼ってきた周りの人々の経済状況も悪化してしまったりしたことなどにより、家賃や光熱費が払えない方、日々の食べるものに困るほど生活に困窮する方からの相談が増えました。

中でも、仮放免中の方や難民申請を複数回行っている方の生活が立ち行かなくなってきたり、「ライフラインが止まってしまった」という相談もありました。また、ホームレスとなってしまった方からの相談も相次ぎ、JARの支援を受けてJAR事務所近くのホテルに泊まる方が常にあるような状態となりました。さらに、医療面でも重い基礎疾患のある方からの相談やコロナ関連の相談など、切迫した相談が続きました。

さまざまな状況の方がいる中で、その方の必要性に応じ、難民申請の相談対応、食料や宿泊場所の提供、受診できる病院の紹介や同行などの支援を行ってきました。JAR事務所近くのホテルに宿泊していた母子が毎日のように事務所に顔を出すということもありました。猛暑で公園などにも行きづらいうち、JARが彼女たちの居場所となっていたのかもしれません。

コロナ禍が長期化する中、難民の方々の就労も厳しい状況が続いています。就労資格のある難民の方々が何とか生活の術を得られるよう、履歴書の作成から面接の練習、会社説明会の同行などのきめ細かい支援を行ってきました。また、就労してからそれぞれの苦労があるため、

定期的に電話をするなど、就労後のフォローも積極的に行っています。先日、会社側から「日本語力には改善の必要がある」



お子さん連れの来訪がある時はキッズスペースを設けています

と言われながらも就職できた方は「毎日仕事が終わってから日本語の勉強をしています。早く日本語を上達させ、仕事にも慣れるよう頑張ります」と話してくれました。

難民を取り巻く制度の改善に向けた取り組みも根気強く続けています。夏の参院選に向けてマニフェスト要望書を作成し各政党に送付したり、入管法改正案の再提出の可能性を踏まえ、問題点の指摘を議員の勉強会で行うなど、様々な働きかけを行いました。

### 【この夏の支援実績】

- ・事務所や収容所等での相談件数 **180件**
- ・電話での相談件数 **628件**
- ・シェルター・宿泊費提供件数 **30件**  
(期間前からのシェルター提供を含む)
- ・物資の宅配数 **126個**  
(支援事業部・定住支援部の支援を含む)

### 【いただいたご支援\*】

- ・ご寄付の総額：**10,875,663円 (732件)**

\*夏の寄付の案内開始(2022年7月1日)から2022年8月31日まで  
\*同期間にいただいた一部の大口寄付を除きます。

いただいたご寄付をもとに、難民の方々への直接支援のほか、政策提言や広報活動など、当会の事業全体に取り組んでいます。

## JAR活動紹介インタビュー vol.2 【渉外チーム：赤阪むつみ】

難民支援協会が日々の活動の中で大切にしていることは何か、スタッフのインタビューでお伝えするシリーズ・第2回は渉外チームマネージャーの赤阪むつみです。難民とともに暮らす社会の実現に向けた法制度の確立を目指し、関係者や市民団体とのネットワーク構築、政府や国会議員などへの働きかけを行っています。



昨年国会に提出された入管法改正案にどう臨んだのかなど、活動の背景にある思いを語ったインタビューをウェブサイトに掲載しています。ぜひご覧ください。

### 難民支援の現場を持つJARならではの政策提言とは。

『私たちの活動の特徴は、同じ事務所の中に支援現場があることです。』『この思いを背負っているんだ』ということが自身の行動の動機となっています。』

記事全文はこちらから読みいただけます▶



## ウクライナ難民の受け入れが進む中、包括的で公平な難民保護を求め発信を続けています

今年2月末に始まったロシアのウクライナ侵攻を受けて、日本政府はウクライナ難民の受け入れを表明し、在留資格の付与や支援策など、かつてないほど迅速な意思決定により相次ぎ具体策を決定しました。民間レベルでも自治体や企業から多数の支援の手があがっています。

JARはこのような難民保護施策や官民での支援が、国籍によらず包括的に行われるべきと考えています。1%未満の難民認定率にとどまる日本では難民として認められることに高いハードルがあり、多くの難民申請者の方々は、不安定な状況に置かれ続けています。JARに相談に訪れる難民の方からも「自分たちは見放されている」と嘆き憤る声を聞いています。

JARでは包括的で公平な難民保護の実現を求め、ウェブサイト等で意見を表明したほか、マスメディアからの取材やSNSにて発信を続けています。同時に、難民の当事者に関する報道が急増したことを受けて、報道によるリスクについてまとめた『難民の報道に関するガイドブック』をメディア関係者と共に作成、6月にウェブサイトで公開しました。

JARも参加する難民支援ネットワーク団体「なんみんフォーラム」では他団体と連携して、おもにウクライナ難民の方への支援を行う相談センター「Support-R」を立ち上げました。JARはフォーラムの一員として、難民・難民申請者からの個別相談の窓口を担うほか、受け入れ支援を希望する自治体・企業等への情報発信などを行っています。

## イベントを通じて難民支援の輪が広がっています

コロナ禍に伴い会場での開催を見送ってきたチャリティラン&ウォーク「DAN DAN RUN 2022」を3年ぶりに会場で開催しました。豊洲の会場とオンラインを合わせて312名の申込をいただき、ボランティアの方々の運営でスポーツを通じて楽しみながら難民について知っていただく機会となりました。

6月には「世界難民の日」に向けて、今の想いや意見をSNSで投稿してもらうキャンペーン「#難民に心を寄せて」を実施しました。集まった声はYouTubeのライブ配信で紹介し、難民の方のインタビューやスタッフのトークと共に届けました。

また8月には、神保町の書店で子ども向けに絵本を通じて難民について学ぶイベント「絵本でまなぼう。なんみんのこと」を会場・オンラインで同時開催。難民への関心が集まる中、さまざまなイベントを通じて難民支援の輪を広げることができました。



YouTube番組『難民を理解するための15分』がスタート！



認定NPO法人 Dialogue for People (D4P)の YouTube チャンネルで、『難民を理解するための15分』がスタートしました！JAR代表理事・石川えりがナビゲーターとなり、難民について理解を深められる様々なトピックを毎回15分でお届けします。

第1回『難民とは？』では、難民に関する基本的な知識について解説しました。8月末までに第4回まで配信されています。毎月新しいトピックでわかりやすくお伝えしていきますので、ぜひご覧ください！



東日本大震災で自らも被災しながら、東北に暮らす外国人の支援に取り組んだ、ある移住女性の記事を公開しました。ウェブマガジン『ニッポン複雑紀行』

JARが運営し、日本の移民文化・移民事情を伝えるウェブマガジン『ニッポン複雑紀行』で、新しい記事を公開しました。

1990年代に中国から留学生として来日し、宮城で暮らしていた裘哲一さん。東日本大震災で自らも被災しながら、東北に暮らす外国人の方々への支援に取り組み、様々な背景をもつ女性たちとつながり合うまでの軌跡を記事にしました。ぜひご覧ください。

『誰でも自由に声が出せる、苦しいときには頼れる  
つながりを求めて。裘哲一さん #移住女性の声を聴く』

著：望月優大 写真：柴田大輔



Follow  
me

SNSやメールマガジンでも、日本に逃れた難民に関する情報やJARの活動について発信しています！ご利用の方は、ぜひフォローをお願いします。メールマガジンのご登録はこちらから↓



@ja4refugees



『新型コロナウイルスに関して』

JARでは、新型コロナウイルスに関して感染拡大を防止するため、支援している難民の方々に必要な情報を発信するとともに、スタッフにリモートワークを導入するなどの対応をとっています。できる限り難民の方々への支援を維持するように工夫を進めていますが、支援者の方々への対応を含め、業務に影響が出る可能性があります。あらかじめご了承ください。

毎月のご支援が難民の命と未来を支えます

難民スペシャルサポーター募集中

1,500円 あれば、



難民申請手続きのための  
交通費を支払えます

3,000円 あれば、



路上生活に耐えている難民が  
宿で一泊休むことができます

5,000円 あれば、



成田空港に向き、とどめ  
置かれた難民に面会できます

ご支援はこちら

[www.refugee.or.jp/kifu](http://www.refugee.or.jp/kifu)

Tel: 03-5379-6001 (広報部まで)

※ご寄付は、税控除の対象となります。  
※遺贈によるご寄付も承っております。